

(6)

財団からのお知らせ

第7回とうきゅう環境浄化財団 助成研究ワークショップのご案内

「水循環における涵養機能について～多摩川からの報告」

水の涵養は河川・地下水の水量の確保、水質の浄化、生態系の保全、洪水の予防等様々な機能を果たしています。

当財団の助成研究には水の涵養に関する研究が多数あります。今回はその中から三つ研究を選び研究報告並びに討論を通して新たな環境回復の指針を探りたいと思います。

プログラム

13:00	開会挨拶	とうきゅう環境浄化財団 理事長	五島 哲
13:05	報告1	「多摩川上流部の水源林の保水能力の推定に関する研究」 95年～96年助成 多摩川研究者	市川 新
13:35	報告2	「多摩川における伏流機構と水質浄化機能評価に関する研究」 97年～99年助成 法政大学工学部 教授	山田 啓一
14:05	報告3	「現地観測に基づく日野市の水環境保全に関する水文的研究」 93年～95年助成 浅川勉強会 代表	山本由美子
14:35	休憩(15分)		
14:50	総合討論会	コーディネーター とうきゅう環境浄化財団 常務理事 コメンテーター 東京大学 名誉教授	岩間清之介 高橋 裕
16:00	閉会		

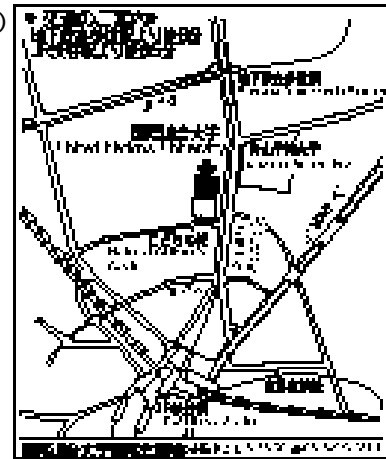
日時 / 平成13年7月26日(木)
13:00～16:00

場所 / 国連大学 5階
Conference Hall

定員 / 100名

参加費 / 無料

主催 / 財団法人
とうきゅう環境浄化財団



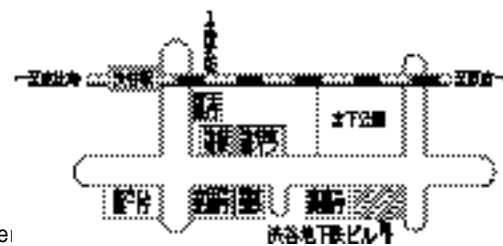
申込方法 /
往復ハガキに住所・氏名(勤務先の場合は役職名、自宅の場合は所属団体名)各々の電話番号を明記し事務局までご送付下さい。FAXでも可(要返信FAX番号)

申込〆切 /
お申込みは先着順で定員になり次第、〆切ります。(定員以内の場合は、7月13日〆切)

お申込み・お問い合わせ /
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
(財)とうきゅう環境浄化財団
☎(03)3400-9142 ☎(03)3400-9141

・発行日 平成13年6月1日
・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141
ホームページ <http://www.246.ne.jp/tokyuei>

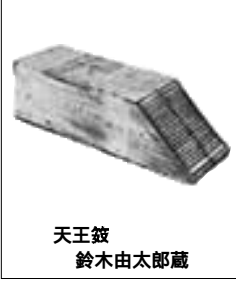
*印刷所 雄文社 〒336-0001 さいたま市常盤9-11-1 TEL (048)831-8125



この用紙は再生紙を使用しています

(1)

財団だより



天王鼓
鈴木由太郎蔵



多摩水道橋と河川敷イベント会場 (01.3.25)

多摩川現風景

(46) 多摩水道橋の開通

多摩水道橋は、昭和28年に主要地方道世田谷町田線(世田谷通り)の道路橋として開通した。相模川の水を都内に供給するための水道管が付設されていたため多摩水道橋といわれ、かつての「登戸の渡し」と替わり、狛江市の和泉地区と川崎市登戸を結ぶ役割をはたしていた。その後混雑が激しく、橋も老朽化したので、拡幅工事が進められていた。

工事は平成4年から始まり、最初に、上流側に新しく2車線の橋を完成し、通行を開始し、それから下流側に、従来からの橋を撤去した後に2車線の橋を増設した。

3月25日に開通式が行われ、翌26日に、全面開通した。25日には、川崎側と狛江側の住民が主催する多彩なイベントが繰り広げられた。「橋・わたし・夢フェスタ 多摩川が熱い」と名づけられた。橋の上では、「にぎわい天国」開通記念式典、地域のお神楽、お囃子、綱引き大会、歩行者天国、橋上展覧会。狛江側の河川敷では、「バラエティ天国」模擬店、フリーマーケット、子ども工作教室、和泉式土器野焼き、多摩川自然水族館。

川崎側の河川敷では、「ライブ天国」、「ちびっ子天国」、「サッカー天国・大空天国」がバンドを披露したり、サッカー、凧揚げ、熱気球などが行われた。

川では「ダービーダックレース」というオモチャのアヒルの大レースが開催された。

橋の開通を祝う地元住民の熱意が伝わるお祭りである。これでぐーっと橋が住民に近づいたのではなからうか。

・関連する財団の研究助成

< 学術研究 >

多摩川における河川敷利用の変遷について
1994年 三井嘉都夫 法政大学 (No.159)

< 一般研究 >

多摩川流域平野の地理学的研究 地形分類と渡河点との関連について
1979年 内田和子 東京都立福生高校 (No.4)

橋梁による多摩川の地域文化の変貌と環境破壊の調査研究

1981年 石井作平 たまがわこども文化の会 (No.14)

絵画にあらわれた河川景観の変遷 多摩川を主として
1994年 岡村直樹 フリーライター (No.84)

右上の写真は当財団助成研究「多摩川水系における川漁の技法と習俗」(安斎忠雄・1983年)より抜粋して漁具を紹介しています。

(2)

多摩川散歩

多摩川源流研究所設立および 会報について

多摩川源流研究所主任研究員 井村 礼恵

多摩川源流研究所は今年4月8日に設立したばかりです。研究所では、水源の森林の環境保全を前提として、第一に「水と緑」をキーワードに、源流の自然的資源、歴史的文化的資源、経済的資源の徹底した調査・研究を進めていきます。源流は、沢山の木が繁茂し、生き物も豊富で澄みきった水が流れています。源流の四季の変化は素晴らしい、人口は少ないですが生活に根ざし歴史に刻み込まれた文化があります。都市部と比べものにならないくらい豊富な植物、生き物がいます。これらすべてを対象にした基礎研究を進め、こうした取り組みを、地道に系統的に調査・研究し、データを蓄積していくことを目指しています。また、植生生態だけでなく、日々の生活の中で営まれ築かれてきた文化に注目し、民俗学的分野の研究にも力を注いでいきたいと考えています。

また、研究所では、年4回会報「源流の四季」

を発行します。源流に関するあらゆる情報を流域に発信し、多くの流域住民が源流に関心を持ち注目し源流ファンになるよう系統的に取り組んでいくという目標のもと、その重要な手段として、会報「源流の四季」を発行していきます。この会報「源流の四季」が、源流と源流の住民を結び絆であり、さらに源流と流域の住民を結び絆となることを期待しています。現状では多摩川源流に関する情報は極めて少なく、多くの都民には、奥多摩湖に流れ込んでいる丹波川や小菅川の存在がよく知られていないのが現実のように思います。また、源流地域における急速な過疎化の実態にもあまり関心が向けられていないといえるでしょう。会報「源流の四季」では、源流のありのままの姿をたくさん写真とともに発信していきたいと思えます。

会報「源流の四季」創刊号は、好評につき、すでになくなり、次回は夏号(7月1日発行)となります。送付ご希望の方はこちらまでご連絡ください。(送料共無料です)

多摩川源流研究所

TEL/FAX: 0428 - 87 - 7055



多摩川源流研究所の会報「源流の四季」

(5)

「水辺の楽校」について

最近の新聞紙上に湘南で初の「水辺の楽校」が平塚市の海岸に近い相模川河川敷に完成したことが報じられていた。

約10万平方メートルの敷地に池や入り江、小川、ヨシ原をつくり、野鳥観察もできる本格的なピオトープが誕生した。

全国各地に「水辺の楽校」づくりがすすめられている。身近な自然の中で、子供たちが自然を体験する場を作ろうとする新しい試みである。

2002年度から始まる新学習指導要領では、体験学習などを通じて、「ゆとり」の中で「生きる力」を育むため、総合的な学習の時間が導入されることとなった。

生活体験や自然体験をすることにより、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、問題を解決する。

頻発する少年をめぐる事件の数々、厳しい学習状況にかかわらず低下する学力、教育の危機的状況への反省が、この改革に込められている。

レイチェル カーソンが「センス オブ ワンダー」でのべたように、子供たちにとって自然に触れる驚き、生への感動は、単なる知識の習得よりもっと重要である。

このような時に、身近な自然を体験する場として、地域の川の役割が新たにクローズアップされてきた。

国土交通省が、地方自治体、NPO、ボランティア等地域の方々と共に「水辺の楽校」づくりを進めていることは、時宜を得たものと思われる。

河川管理者である国土交通省は市町村からの要望に基づき「水辺の楽校」の登録を検討し、市町村は、NPO、ボランティア等地域の方々と共に推進協議会をつくり、楽校計画を策定する。ハード整備が必要な場合は、計画の内容を検討し、予算化の上、水辺整備を行う。ハード整備が必要でない場合は、川に関する情報等を提供する。

全国における「水辺の楽校」の登録個所の推移は現在のところ、次のとおりである。

平成8年度	119カ所
平成10年度	41カ所
平成11年度	15カ所
平成12年度	22カ所
合計	197カ所

東京都でも、平成12年度に、日野市・浅川(潤徳小学校)、日野市・浅川(滝合小学校) 狛江市・多摩川(狛江第六小学校、狛江第八小学校)などで登録がおこなわれている。

狛江市の事例をご紹介したい。小田急線の和泉多摩川の鉄橋から約500米ほど下流の左岸の岸辺に「狛江水辺の楽校」計画が進められている。

もともとこの辺りは、緑の土手、草地、中州、自然池、湧水、小川、雑木林など変化に富んだ岸辺があり虫、魚、野鳥、小動物、草木、樹木など種々雑多な生態系の縮図がみられる場所であった。

ただ、宿河原堰堤の延長工事として作られた護岸壁はあまりにも堅固で、垂直に切り立っており、子供たちが気軽に川辺に近づくことが難しかった。これを緩やかな傾斜に改め今ある自然を保存しつつ最低限の清掃整備を行う方向で進められている。

国土交通省の京浜工事事務所が協議している整備内容は次のとおりである。

- 整備計画 水遊びができる小流とワンドの造成
- 整備計画 水生昆虫が観察できるオタマ池の保水と整備
- 整備計画 子供たちが安心して遊べる冒険林の整備
- 整備計画 水生昆虫が観察できるヤンマ池の保水と整備
- 整備計画 湧水の保存とホテル復活のための水路及び散策路の整備

この計画の中心となり、活躍されている竹本 久志さんは平成5年ごろから、狛江市の多摩川の岸辺で狛江ぼたる村村長として、少年たちと自然観察会や自然保護活動に取り組んでおられた。

「狛江水辺の楽校」の計画も、それらの一連の流れの延長線上にある。

竹本さんは、同じ狛江市猪方に住む横山十四男さん(多摩川センター代表)と共に「狛江水辺の楽校」友の会をつくり、地元の小中学校とも協議しつつ計画を進めている。

自然観察会も着実に回を重ねており、「春の七草を親子でさがそう」、「多摩川にめだかの楽校をつくらう」、「湧き水の小川にメダカ橋とオタマ橋をつくらう」、「おたまじゃくしを親子でさがそう」、「みんなでトンボ橋とホテル橋をつくらう」、「多摩川ホテル観賞会」などのテーマで着実な活動を行っておられる。

竹本さんは、「わけもなく歳を重ねて気付いてみたら、戴きっぱなし……そろそろ地元にお返しをしなくちゃ……ね。」と。

岸辺への進入路の工事は進んでおり、まもなく子供らの歓声が聞こえる日が間近である。

(4)

よみがえ

甦れ！多摩川

ニヶ領用水を歩く その3

東横線の武蔵小杉駅からバスに乗り「小杉十字路」で下車、ニヶ領用水はここ神地(ごうじ)橋で中原街道と交わる。川水に恵まれかつては稲毛米といわれる良質のお米がこのあたりで産した。

水は多少濁っているが、3米ぐらいの川幅で水が流れている。鋼管パイプを組み合わせた簡単な構造の上小田中3、2、1号橋を過ぎ、先へ進む。

側道には桜が植えられ、並木になっており、花の季節には花見で賑うのであろう。

側道から、川縁へ石段が作ってあり、容易に川に近づけることが出来るようになっている。

川の中には、菖蒲が盛りを過ぎているが、黄色の花々が伸び伸びと、華やかに川面を彩っている。

この辺りは「今井上町緑道」といわれ、川の両側はきれいに整備されており、市民の憩いの散歩道となっている。

松尾橋に至る。水に近づける工夫がいろいろとなされており、どちらかという小さな川の割に巧みな工事がなされており、中小河川を公園とか、環境河川として市民が愛着をもつような活かし方がなされている。

とは言え、増水時や、小さな子ども達に対する心遣いがなされており、「この近くは急に深くなります。川崎市」という看板が川の中に立てられたりしている。

小鷲が降りしきる雨の中で川の中に立ちすくんでいる。近づいても、人を怖れる風もなく、ゆっくりと足を移動している。

山王橋に至る。今井上橋を過ぎる。国道409号線の小杉御殿の交差点を渡り、南武線をくぐる。今井仲橋には駐輪場がある。渋川との合流点で、水門がありニヶ領用水の水が流入している。

この辺りでは、明治の中ごろまでは用水を利用した水車がいくつかあり、精米、精麦などが盛んであった。

ここで作られた粉をもちいて、木月村、井田村、今井村などの冬の副業の素麺などもつくられていたようである。側道の樹のそばに、面白い看板がでている。

ナポレオンサクラの苗木を植えられた小滝房次郎さん(88歳)、川村鶴吉さん(77歳)が建てられたもので、「5年後、十個以上。十年後、五十個以上、三十年後、数千個以上のサクラの実がなる。

自分達はそのころいないが、中原区民、川崎市民、日本国民の皆様にしあげるので、どうかこの樹を大事に育ててください。」と記されており、傍らにはサトウニシキのサクラの苗木にも同じ趣旨の看板が建てられている。ほのぼのとした気持ちで先へ進む。

今井南橋辺りでは、両岸の擁壁を支えるため、水平に支柱のコンクリートの柱が3米ほどの間隔で並べてある。植栽も行き届いており、よくできた遊歩道である。今井中央橋に至る。川幅が狭くなり、川として貧弱な感じを否めない。

今井中央橋のふもとには、川岸に近づけるように石段が出来ている。自然石を積した、石積みがなされており、きれいに整備されている。側道も砂礫を固めた浸透性の舗装になっており、雨水が地中にしみる工夫がされている。住民がプランターに草花を植えて楽しんでいるようである。自転車等放置禁止区域となっているようだが、不法駐輪の自転車が、禁止看板が立てられているが、あまり効果がないようである。

今市橋では、サツキが花盛りで目を楽しませてくれる。仲よし橋の所がごみ収集所になっており、橋の歩道部分がふさがって通れない状況である。皮肉なことに、散乱防止、ポイステ禁止の掲示がされている。

東急東横線をくぐり、東住吉小学校に至る。用水は東住吉小学校の横を流れており、学校の敷地が雨水貯留池になっている。大雨の時に一時的に学校敷地内に雨水を貯留し、河川の負担を軽減する仕組みになっている。東京・丸子・横浜線の道路をわたり、今市橋に至る。橋のたもとにゲートボール場があり雨の中にかかわらず数人の御年寄りが熱心にプレイしている。

市ノ坪2号橋をすぎ、用水は中原平和公園の林の中に分け入っていく。戦没者を祈念して建設された公園でかなり大きな公園で、冒険広場、はだしの広場などがあり、林の中には、児童の遊園施設もあり、休みの日には親子連れで賑いあうものと思われる。

県立住吉高校も隣接している。市ノ坪1号橋あたりには、側道を川にむけて降りると、藤棚のある、休憩所が二つばかり設けられてあり、花の季節には十分楽しめる。川の水も澄んでいて、気持ちが良い。

和合橋、昭和橋を過ぎ、東海道新幹線の高架が見える辺りでは、地域排水の白濁した水が用水に流れ込んでいる。ポリスチロール、ペットボトル、プラ袋などが散乱して用水の淀みに溜まっている。

新幹線の高架を過ぎ、苅宿1号橋を通り、横須賀線の下を用水は潜ってゆく。迂回して横須賀線の向こう側にゆくこととした。公社市ノ坪住宅の裏で、御幸踏線橋が横須賀線に交差するところにニヶ領用水は顔を出す。大鹿橋は交通量の多い橋である。さくら橋辺りはコンクリートに固められているが用水の幅も広く、側道も桜など植樹がなされており人工的ではあるがよく整備されている。長寿橋を過ぎ、三八子橋に至る。

フエンスには魚がレリーフになって飾られてある。朱印橋辺りでは川の水は濁っている。鹿島田橋を過ぎ、人っ子一人いない淋しい側道を歩きつづける。南武線の川崎堀踏切をわたり、浄水所の近くまで来ると、用水は小川となり、池となって親水公園の一部と変わってくる。かつて、この辺りで用水は町田堀と大師堀に分水されていた。

親水公園で、ニヶ領用水が次のように紹介されている。「昭和14年、わが国最初の公営の工業用水として1日27,000トンの取水が行われ、49年まで平間浄水所から臨海部の工場地帯へ供給された。」

ニヶ領用水は、時代の変遷に伴い、農業用水から工業用水へ、さらに環境用水へとかたちを変えて人々の生活に役立って来たのである。

ニヶ領用水の水はこの辺りで暗きよで下水道に入り、戸手ポンプ場を経て入江崎環境センターに送られる。

かわせみ 翡翠



(3)

私と多摩川

稲城市在住 荒井 理子

私は20年ほど前、調布市の多摩川の近くに住んでいたが、格別多摩川に関心は持っていなかった。小学校PTAの自主学習サークルが「多摩川」をテーマに取り上げてから少し関心を持つようになり、かつて多摩川大橋の橋脚が中性洗剤による白い泡で埋まっていたことなどもそこで知ったが、それほど心に残らなかった。

それから間もなく“梨の里”稲城に越してきた。20年近くも前の稲城は、灌漑用水路が市内を縦横に走っていた。すでに溜れたり、ドブ川と化している用水路もあったが、多摩川から引き込んだ水が豊かに流れている場所も少なくなかった。

市内には曲りくねった農道のような道が多く、田んぼと用水にはさまれた道では、片足を田んぼに落としている車も時々見かけた。

車人間の私だが、狭い道は狭いままに、曲りくねった道もそのままに、道路を広げないで欲しいと願っていた。車が我慢すべきだと...

今、あの用水のほとんどは暗渠となったり、埋め立てられて立派な？道路に姿を変えた。

梨の花が白いことを知り、れんげ草のピンクの絨毯に感動した。その絨毯も今はない。

稲城市内を貫いて走る鶴川街道沿いの坂浜と呼ばれる辺りは、北側には畑や藁葺き屋根の家が点在し、たわわに実った柿の枝越しに焚き火の煙と匂いが漂ってきた。

南側は、三沢川が昔ながらの姿で街道とつかず離れず流れていた。生い茂った木々の葉やつる草の間から垣間見える川面は、晴れた日、曇った日、雨の日、そして四季折々にさまざまな表情を見せながら流れ、ところによっては爽やかな水音で人間に語りかけてきた。

この辺りの三沢川は今も往時の面影を残してる。

この鶴川街道もまた、広くもない道をトラックの列が砂塵を巻き上げて走り、清流と会話を交わせる雰囲気ではなかった。それでも私はこの道が好きだった。

最近では随所で道路が拡幅・整備されて随分趣きが変わった。これが旧三沢川の健康を損ねなければよいが...と思う。

私が越してくる前だが、市役所の移築に伴い、氾濫防止のため、蛇行していた旧三沢川の下流部分を真っ直ぐにして本来の川筋を変えたという。

今は市役所の裏手を流れるこの新三沢川はコンクリート護岸、周りを高いフェンスで囲ってあって、人間が水辺で遊ぶことはできないが、鯉が棲みつきマイホームを構える水鳥もいる。

ある時、定期的に行われる川原の草刈の後、外出から帰ってきた鴨の一家が、忽然と家が消え失せた中洲に呆然と立ちつくしていたことがあった。

鴨たちのために少しだけ草むらを残してあげて欲しかった。一本一草全てを刈り取ることが「清掃」なのだろうかと思いつつ、血の気の多いオバサン仲間と「家を返して！」という看板を中洲に立てようとしたが、フェンスを乗り越える術がなく実行を見合わせたことがある。

鴨の側に立てなかったことが申し訳なく、いまだに鴨の顔を真っ直ぐみることができない。



稲城市坂浜地先の三沢川 (01.5.17撮)